

上古中国語音韻体系に於ける T-type/L-type 声母について ——楚地出土竹簡を中心に——

野原 将揮

要旨 本稿は上古中国語音韻体系に於ける T-type と L-type 声母の仮説について分析を加えることを目的とする。この仮説は中古で端・知・章組（一部）の声母が上古では2類に分類されるという仮説である。これは諧声系列の分布に基づく再構で、上古音体系の中でも比較的広く認められた仮説のひとつである。本稿で対象とするのは戦国楚地出土の楚簡に見える通仮字である。考察の結果、楚簡の通仮字に T-type と L-type の区別が見られることが明らかとなった。これは諧声系列から得られた T-type/L-type の再構を支持する証であるだけでなく、戦国楚地（他地域を含む可能性もある）に T-type/L-type の区別が存在していたことを示すものである。また「当時の音を反映していると思われる通仮字に T-type/L-type の区別が見られる」という仮定を前提とすれば、諧声系列上では T-type か L-type かを判断しかねる文字の音声の由来についても明らかにできるものと考ええる。

キーワード 上古音 声母 舌音 楚簡 通仮

1. はじめに

上古中国語の音韻体系を再構するには大変な困難を伴うとされる。その要因は多岐にわたり、たとえば研究対象となる時代・場所を限定し難いこと、中古音からあまりに時代がかけ離れていること、資料に制限があることなど枚挙に遑がない。したがって研究者の再構案には数多くの出入りが見られ、いまそれを概括することさえ困難である。本稿はその中でも比較的認められた L-type 仮説 (L-type hypothesis) について考察を加えることを目的とする。以下では、(1) 先行研究をまとめ、L-type 仮説の妥当性を再考し、(2) 戦国楚地出土の竹簡に見える通仮字に分析を加え、最後に (3) 戦国楚地での舌音の状況を整理し、それを踏まえた上で上古音全体の音韻体系との関連性について考察を加えたい。また本稿で対象とするも

のは戦国時代楚地出土の竹簡で、通常“楚簡”と称されるものである。本稿では、戦国末期のものと思われる『上海博物館蔵戦国楚竹書（一）～（七）』（以下『上博楚簡』と略称する）と『郭店楚墓竹簡』（以下『郭店楚簡』と略称する）に見える通仮字を分析の対象とする。諧声符が反映する時期の音韻体系や『詩経』に反映される詩経音等のあらゆる情報を混同するのではなく、楚簡を利用して“時間・場所”を限定することで、より現実味のある音韻体系を再構出来るものと考ええる。

2. 先行研究・L-type 仮説 (L-type-hypothesis)

B. Karlgren 以来、中古音の舌音（端組）と歯音（章組一部）はすべて上古音の舌音由来（*t-, *th-, *dh-）とされてきたが、E. G. Pulleyblank (1962: 114-115) は以下のような諧声系列の分布が見られることに着目し、Karlgrén が *t-, *th-, *dh- と再構した上古舌音を 2 類に分類している：

余（以）、賒（書）、敝（邪）、塗（定）、除（澄）、荼（定澄書）、稔（透定）
 予（以）、序（邪）、紓（書邪）、野（以常）

この諧声系列の分布をみてみると、声符「余」と「予」は無声無気音の端母・知母・章母と諧声関係が無く、定母・透母・以母・邪母・書母と諧声関係があることが分かる。このような諧声符は一部の例外を除いて数多く確認されており、Pulleyblank (1962: 116) はこれを従来の舌音 (Karlgrén の *t-, *th-, *dh-) とは異なるグループと看做し、*ð と *θ を再構している（前者は中古定母、後者は中古透母へ変遷する）。この再構音は、「余」や「予」のような諧声符が中古定母や透母、さらには以母や書母等と密接な関係がある一方で、端母・知母・章母と交流しないことや中古以母の「弋」を用いて Alexandria の l- を表していること（漢書「烏弋山離」）、また古代タイ語に見える漢語からの借用語「酉」が *r- と再構されること等を根拠に推定された再構音である（「酉」は中古以母）¹⁾。その後、Pulleyblank (1973: 116-117) は Pulleyblank (1962: 116) でも示されるようなチベット語との比較を根拠に *ð/*θ を *l/*lh に改めるとしている（M は中古音、Tib はチベット語を意味する）：

羊 M. yaj “sheep” : Tib. *lug*

葉 M. yep “leaf” : Tib. *lub*

脱 M. thwat, dwat, “take off”, “escape”, M. thwaŋ “easy, leisurely”:

Tib. *lhod-pa* “loose, relaxed”

このようなチベット語との対応や有声側面音である [l] の音質を考慮すれば、上述の諧声系列に *l を再構することが良いと思われる²⁾。ただし、上古舌音に *l- を認めるためには、来母の再構音についても考えねばならない。たとえば、李方桂 (1971: 10) は古代タイ語の例 (Fang-kuei, Li 1945: 336) や Pulleyblank (1962: 116) でも指摘されるような音訳語の例を根拠に、以母に *r- を、来母に *l- を再構している。中古音からの内的再構によれば、李方桂のように上古来母も *l- と再構するのが妥当であるが、A. Schuessler (1974: 191-193) はチベット語との比較に基づき、来母に *r- を再構し、以母に *l- を再構する。N. Bodman (1980: 99) は「佃」「甸」「田」に対応するチベット語 *lings* を挙げ、「佃」「甸」を *lings とし、「田」を *lins と再構するように、定母と *l- を関連付ける。このようにして、現在では上古来母は *r- と再構し、上古舌音には T と L の 2 類を再構するという仮説が広く認められている。以下は W. H. Baxter (1992: 196-197) の中古音までの音韻変遷を含めた再構案である³⁾：

〈T-type〉《中古中国語で端母・知母と諧声関係にあるタイプ》

*t-	>	t-	例) 「當」 :	*tang	>	tang	中古端母
*th-	>	th-	「鎗」 :	*thang	>	thang	中古透母
*trh-	>	thr-	「瞳」 :	*thrang	>	trhæng	中古徹母
*tj-	>	tsy-	「掌」 :	*jjang?	>	tsyangX	中古章母

〈L-type〉《中古中国語で端母・知母を欠き、書母・以母と諧声関係があるタイプ》

*l-	>	d-	例) 「兌」 :	*lots	>	dwajH	中古定母
*hl-	>	th-	「脱」 :	*hlot	>	thwat	中古透母
*hlj-	>	sy-	「説」 :	*hljot	>	sywet	中古書母
*lj-	>	y-	「悦」 :	*ljot	>	ywet	中古以母

以上の見解をまとめ、本稿では以下のように考える (当該仮説を“仮説①”と略称する)：

【仮説①】

〈T-type〉 端・知・章母に現れる。船・以・邪母には現れない。T系由来と考える。

〈L-type〉 端・知・章母に現れない。船・以・邪母に現れる。L系由来と考える。

T-type/L-type は以下のような分布を示す：

	端	透	定	知	徹	澄	章	昌	常	書	船	以	邪
T	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
L		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○

T-type は端・知・章母と諧声関係が有り、船・以・邪母と諧声関係が無いグループである。一方 L-type というのは端・知・章母と諧声関係が無く、船・以・邪母と諧声関係を有するグループである（書母に関しては T-type/L-type のいずれにも由来すると考える）。このような分布は一部の例外字を除き鮮明に現れるものである⁴⁾。その音価は上述したように、様々な音訳語例やチベット語等との比較、また諧声系列上の特徴（無声無気音と交流しない特徴）を勘案すると、*l- を再構するのが良いと思われる。[l] は有声側面音であるから、同じ有声音の定母や有気音の透母と密接な関係があり、反対に無声無気音の端母と交流がないことも理解できる。また *l- と *r- の再構は二等韻や三等重紐 B、複声母、以母とも関連し、その見解には研究者の間で出入りが見られるが、諧声系列上で明確な分布が見られる以上、（その音価はどうであれ）中古の舌音（一部章組合む）の由来を理論的に 2 類に分類するという点は認められるであろう⁵⁾。以下では当該仮説を仮説①と略称する。

3. 楚簡に見える T-type/L-type の通仮

本項は、上述の仮説①が戦国楚簡の通仮字にどのように反映しているかについて考察を加えることを目的としている。以下の 2 点に注目したい：

- (1) 諧声系列を基礎としている仮説①は、楚簡の通仮字でも支持されるか

(2) 楚簡から見る戦国末期楚地周辺での T-type/L-type の状況

まず (1) について、諧声系列の分布のみを基礎とする仮説①は、極言すれば根拠の弱い仮説にすぎない。しかし T-type/L-type の区別が実際に出土した楚簡の通仮字に見えるとすれば、仮説①は支持されることになる。

(2) について、通仮字の性格を考慮すると、仮に楚簡で T-type と L-type が自由に通仮しているとすれば、T-type と L-type は既に戦国楚地周辺では合流していた、或いはそのような区別は元々存在しなかったと考えられる（後者は仮説①の反証例となる可能性もある）。反対に明確な使い分け、つまり T-type は T-type と通仮し、L-type は L-type と通仮するという使い分けが見られ、互いに交流することが無ければ、少なくとも戦国楚地では T-type と L-type の区別が存在していたと看做すことができる。

以下、楚簡の通仮字に分析を加えていく際に、声符を同じくする文字は分析の対象としない。たとえば「立」を声符に持つ「立」と「泣」「位」の通仮が見られるからと言って、安易に来母と溪母・于母の通仮とは考えない。意符はしばしば省略されるため、それを考慮せず、混同してしまうのはあまりに危険である。本稿では原則として声符が異なり字形上関連のない文字のみを扱うこととする。

3.1. T-type の通仮例

通仮字に分析を加えるためには、まず楚簡に見える某字が一体何の字に通仮しているかを調べる必要がある。いま例として、『郭店楚簡』「老子甲本」第 16 号簡を見てみると、「難易之相成也、長崱之相型也」という箇所が見えるが、このままでは「長崱」の意味がよくわからない。そこで今本『老子』を見てみると、「難易相成，長短相形」（難易相成るや、長短相あらわれるなり）とあり、『郭店楚簡』の「長崱」と今本『老子』の「長短」が対応していることが分かる。したがって、「崱」が「短」を表しているということが予想される。しかし、それだけでは通仮の確証を得たことにはならない。音韻論的な裏付け、すなわち「崱」と「短」の通仮が上古の音韻体系内で許されるものであるか調べる必要がある。「崱」は中古音で端母山攝桓韻一等合口平声、上古では端母元部合口である。一方で、「短」は中古音で端母山攝桓韻一等合口上声、上古では端母元部合口である。「端」と「短」は上古ではいずれも端母元部合口であるから、この通

仮は原則として認められる。そこで、上述した仮説①を導入してみると、「崑」はそれ自体が端母であり、以・船・邪母と諧声関係に無いから T-type であり、*ton と再構される。「短」についてもそれ自身が端母であり、以・船・邪母と諧声関係にないから原則として T-type で、*ton? と再構される。したがって、「崑」と「短」の通仮は T-type と T-type の通仮であると言える。

● 「登」「蒸」の通仮：

『上博楚簡（六）』「競公瘡」に「今新登思吳守之」という文が見える。このままでは一体何を意味しているのかが不明であるが、「競公瘡」は今本『晏子春秋』「外篇第七・景公有疾梁丘據裔款請誅祝史晏子諫」、『春秋左伝』「昭公二十年」に対応していることがすでに分かっている。そこで、いま対応する箇所を見てみると、「藪之薪蒸，虞候守之」（藪の薪蒸、虞候これを守る）とあり⁶⁾、「競公瘡」の「登」が今本の「蒸」に通仮すると予想されるのだが、通仮を認めるためにはそれぞれの音韻地位を確認しなければならない。「登」は中古音で端母曾撰登韻一等開口平声であり、上古では端母蒸部開口であることが分かる。一方、「蒸」は中古音で章母曾撰蒸韻三等開口平声であり、上古では章母蒸部開口である。したがって「登」と「蒸」の通仮は認められる。そこで、仮説①を導入してみると、「登」は端母であり、以・船・邪母とは諧声関係に無いから T-type と見て差し支えないだろう（*teng）。「蒸」も章母であるから T-type である（*tjeng）。諧声系列を見ても、以・船・邪母は現れない。したがって「登」と「蒸」の通仮は T-type と T-type の通仮であることが分かる。このようにして通仮字に分析を加えていくと、下に挙げる表1のように T-type はすべて T-type と通仮していることが分かる：

表中の【**図版**】は【**例**】の下線部より引用している。【**表記**】とは図版の文字を楷書化したものである。【**通仮**】には通仮字を示す。【**表記**】【**通仮**】の下の欄にはそれぞれ声符を示す。【**上古音韻地位**】で知組はすべて端組に統一し、T-type にはTと、L-type にはLと付記した。【**諧声関係例**】の（ ）内に示した声母は中古音声母である。【**例**】に挙げたものは意符を異にするものも含む。「S」は『上博楚簡』、「G」は『郭店楚簡』、数字は巻号数を表す。

表1 〈T-type と T-type の通仮例〉

図版	表記	通仮	上古音韻地位	諧声関係例	例
	耑	短	耑(端元合)T	端(端)顛(章)	G 老甲 16, S 曹 30
		豆声(?)	短(端元合)T	豆(定)豎(常)	
	𠂔	德(惠)	得(端職開)T	得(端)得(知)	S2 民 12
		直声	德(端職開)T	直(澄)、植(知)	
	𠂔	誅	豆(定侯開)T	郢(端)頭(定)	G 五 35, 38, 39
		朱声	誅(端侯開)T	侏(章)洙(常)	
	𠂔	注	豆(定侯開)T	郢(端定)頭(定)	S2 容 25, 26, 27
		主声	注(章侯開)T	主(章)柱(知澄)	
	貞	正	貞(端耕開)T	偵(知)禎(知)	G 緇 3 (S1 緇 2 : 「正」)
			正(章耕開)T	征(章)定(端定)	
	𠂔	斷	𠂔(定章元合)T	傳(知澄)專(章)	G 六 44, 42, 43, G 語二 35, S 曹 62
		𠂔声	斷(端定元合)T		
	種	春	種(定東開)T	董(端)鐘(章)	S2 容 21
		童声	春(書東開)T	椿(端)忸(書徹)	
	𠂔	淑	𠂔(端幽開)T	𠂔(端)	G 緇 4, 32, 39, S1 緇 3, 16, G 窮 8
		𠂔声	淑(常覺開)T	叔(書)琡(章昌)	
	𠂔	著	𠂔(端鐸開)T	𠂔(端)	S1 緇 23 (G 緇 44 : 「𠂔」)
		𠂔声	著(端魚開)T	者(章)賭(端)	
	登	蒸	登(端蒸開)T	鄧(定)澄(澄)	S6 競 8
		丞声	蒸(章蒸開)T	丞(常)丞(章)	

以上の例は全て T-type と T-type の通仮であり、T-type が L-type と通仮することはない。以下では L-type の通仮を詳しく見ていきたい。





3.2. L-type の通仮例

● 「墜」「地」の通仮：

『上博楚簡（二）』「容成氏」に「天墜人民之道」という句が見え、見慣れない文字「墜」がある。「天地」という語は先秦文献中でも用例が見られ、「墜」は楚簡中で「地」に読むことがすでに認められているから通仮と看做して良いと思われる⁷⁾。「墜」と「地」の音韻地位を見てみると、「墜」（陀）は中古音で定母果摂歌韻一等開口平声、上古音では定母歌部開口であり、「地」は中古音では定母止摂脂韻三等開口去声、上古音では定母歌部開口である。したがって、「墜」と「地」の通仮は認められる。では、「墜」「地」が T-type か L-type かというと、「墜」と「地」は定母であるから、これだけでは T-type か L-type かを判断しかねる。そこで「墜」の諧声系列を見てみると、定母の「佗」、船母と以母の「蛇」があり、端母・知母・章母とは関係がない。仮説①に従えば「墜」は L-type 声母である。「地」の諧声系列を見てみると、邪母の「地」、以母の「池」が見え、端母・知母・章母とは諧声関係にない。仮説①に従えば「地」もまた L-type 声母であることが分かる。このように「墜」と「地」の通仮は L-type と L-type の通仮であると言える（「墜」*laj 「地」*lɾjajs(?)）。これ以外の例も下に挙げる表 2 のように L-type は L-type と通仮し、T-type との交流は見られない：

表 2 〈L-type/L-type 通仮例〉

図版	表記	通仮	上古音韻地位	諧声関係例	例
	墜	地	墜(定歌開)L	佗(定)蛇(船以)	S2 容 8, 9, 16, 19, 30, S2 従甲 2, G 太 1, G 窮 5
	它声	也声	地(定歌開)L	地(邪)池(以)	
	勑	勝	勑(船蒸開)L	駮(船)剩(船)	G 成 8, 7, 9, 36, G 尊 1, S2 従乙 3, S4 曹 33
	乘声	朕声	勝(書蒸開)L	騰(定)贖(船)	
	述	遂	述(船物合)L	朮(澄)術(船)	G 成 6, 17, 23, S2 容 34, G 老甲 39, G 五 34
	朮声	豕声	遂(邪物合)L	墜(澄)櫂(邪)	

	軸	覃	軸(邪侵開)L	蕁(定)鄆(邪)	S1 詩論 16
	尋声		覃(定侵開)L	暉(書)潭(以)	
	昏	陶	昏(以幽開)L	悞(透)稻(定)	G 性 24, 31, 44
		缶声? ⁸⁾	陶(以透幽開)L	甸(定)	
	涅	盈	涅(以耕開)L	聖(書)聽(透)	G 性 64, G 老甲 16, 乙 14, G 太 7
	呈声		盈(以耕開)L	楹(以)	
	繇	由	繇(以幽開)L	遙謠(以)	G 成 6, 14, G 尊 3, 10, G 六 7, G 語一 1, 19, 20, 21
	耆声		由(以幽開)L	抽(徹)岫(邪)	

T-type の通仮が T-type に限られると同様に、L-type の通仮は L-type に限られる。このように楚簡に於ける通仮字は T-type と L-type を明らかに区別する。そこで、以下のようなことが推定される：

- (1) 仮説①は支持される。仮説①は中古音への音韻変遷や諧声系列を基礎とした推定であり、上古音をめぐる多くの仮説に言えることでもあるが、やや根拠の弱い仮説である。しかし、当時の音を反映すると思われる通仮字にも T-type と L-type の区別が見られることが明らかとなった。これは仮説①を支持する証のひとつとなる。
- (2) 楚簡の通仮字に区別が見られるということは戦国末期の楚地周辺に於いて T-type と L-type の区別が存在していたと考えられる。ただし、厳密に言えば、楚簡が楚地の言語のみを反映しているとは考え難い。たとえば『上博楚簡(六)』「競公瘡」は『晏子春秋』との関連が見受けられ、この場合、斉との関係も考えねばならない。近隣地域との言語接触も念頭に置く必要があるだろう⁹⁾。また楚簡が表記されたものであるということを考慮すると、やや古い体系を保存している可能性も否定はできない。
- (3) 仮説④から T-type か L-type かを判断できない文字の声母の由来を通仮字から判断できるかもしれない(たとえば L-type と通仮する文字は L-type であるというように)。

楚簡に見える通仮字の分析を通して、以上の3点が考えられる。仮説④か

ら得られた T-type と L-type の区別が実際に出土した文字資料に反映されているということは上古音を考える上で実に意義深い。(3) については次項で扱う。

4. 楚簡の通仮例を基礎とした T-type/L-type 再構

前項で分析したように、仮説①は楚簡に見える通仮字の状況からも支持される。そこで、いま前項の (3) について考察を加えていきたい。仮説①は諧声系列を基礎としており科学的な手法であるが、実は仮説①では T-type か L-type かを判断できない文字が多数ある。この「仮説①では t-type か L-type か判断できない文字」というのは、すなわち (1) T-type の特徴だけでなく、L-type の特徴をも欠くような文字(「田」「同) や、(2) T-type の特徴と L-type の特徴のいずれも有する文字である(「庶」「多」「甚)(牙音とも関連)。この様な文字は仮説①からは T-type か L-type かを判断できないため、中古音からの内的再構により、主に T-type として扱われることが多い。しかし、楚簡に見える通仮字が諧声系列の分布と同じように T-type と L-type を区別するとすれば、通仮字からその由来を推定できるのではないだろうか。本稿では、「T-type か L-type かを判断できない字」が、楚簡に於いて T-type と通仮するとすれば、T 由来と看做し、反対に L-type と通仮しているのであれば L 由来と看做すことができると考える。以下、これを仮説②と称し考察を加えていく：

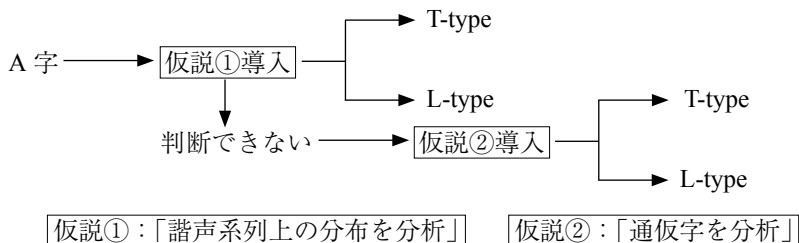
【仮説②】

T-type と通仮 → 被通仮字も **T-type** と推定 (その逆も同様)

L-type と通仮 → 被通仮字も **L-type** と推定 (その逆も同様)

いま例をひとつ挙げてみよう。たとえば「田」は諧声系列上では「T-type か L-type かを判断できない文字」のひとつである。なぜならば定母である「田」は端母・知母・章母と諧声関係が無く、以母・船母・邪母とも諧声関係が無い。したがって「田」は仮説①を導入しても T-type か L-type かを推定できない。いま通仮字を見てみると、「田」は『上博楚簡(六)』「平王與王子木」第1号簡に「繡」字の声符として見え、「申」に通仮する。「申」は仮説①を導入してみると、その諧声系列上に以母の「棘」が見え、端・知・章母とは諧声関係が無いから L-type である。そこで仮説

②に従えば、L-typeの「申」と通仮している「田」もまたL-typeとすることができ¹⁰⁾。この手順を整理すると以下ようになる：



以下は T-type/L-type の判断が困難な文字の通仮例である。表 3 は T-type/L-type のいずれの特徴も欠く例を挙げる：

表 3 〈T-type/L-type の判断困難な文字の通仮例 (1)〉

・ T-type と L-type のいずれの特徴も欠く文字

* 表中の【表記】【通仮】欄に網掛けされている字が T-type/L-type の判断困難な文字である

図版	表記	通仮	上古音韻地位	諧声関係例	例
	通	通	同(定東開)?	侗(透)銅(定)銅(澄)	S2 容 25, 26, 27, G 語一 102
	同声	甬声	通(透東開)L	甬(以)桶(定)	
	踊	踊	同(定東開)?	侗(透)銅(定)銅(澄)	G 語三 41
	同声	甬声	踊(以東開)L	甬(以)桶(定)	
	蹈	蹈	道(定幽開)?	首(書)	S2 容 44
	首声	昏声	蹈(定幽開)L	昏(以)	
	煮	圖	者(章魚開)T	都(端)署(常)暑(書)	S1 緇 12, S4 曹 2
	者		圖(定魚開)?	圖(定)	
	申	吞 ¹¹⁾	申(書真開)L	神(船)紳(以)	S2 子羔 11
	申声	天声?	吞(透真開)?	天(透)	





	跳	盜	兆(定宵開)L	姚(以)挑(透)跳(定)	S2 容 6, G 老甲 1, 31
	兆		盜(定宵開)?	盜(定)	
	連	陳	申(書真開)L	神(船)輶(以)	S1 緇 20, 10, G 緇 19, 39
	申声	申声? ¹²⁾	陳(定真開)?	嗽(澄母)	
	湯	唐	湯(透陽開)L	揚(以)場(澄)	G 唐 1, 3
	易声	庚声?	唐(定陽開)?	庚(見)	
	社	睹	土(定魚開)?	社(常)杜(定)	S7 武王 1
	土	者	睹(端魚開)T	都(端)署(常)暑(書)	

表3一番上の「同」は仮説①からでは T-type か L-type かを判断できない。しかし、楚簡中では L-type である「甬声」の文字と頻繁に通仮している。したがって、仮説②により「同」は L-type と看做することができる。「道」も同様に仮説①からは T-type か L-type を判断できない。しかし、「道」は「昏声」の「蹈」と通仮しており、L-type である可能性が高い。また表3一番下の「土」の諧声系列の分布は「田」や「同」と同様に L-type に近く（透母と定母を中心に分布）、Bodman (1980: 102)、Baxter (1992: 793)、鄭張尚芳 (2003: 480-481) も L-type と看做している。チベット語との比較によれば、「土」は L-type とすべきかもしれないが、楚簡の通仮字を見てみると T-type と通仮し¹³⁾、『古字通仮会典』(1997: 890)にも T-type である「者声」の文字との通仮例が見えるため「土」も T-type とするのがよいだろうか。ただ、後述するように（表5）、T-type と L-type が通仮する例も幾つか見られる。チベット語等との比較を勘案すると、「土」も表5のような例に含まれる可能性も否定できない。

以下は表3に挙げた例の再構音（筆者再構）とその諧声系列である（OBは Old Chinese Baxter の略称。ここでは参考として Baxter (1992) の再構音を用いる。「土」については疑問符を付しておく）：

「田」	*lin	(OB*din) ¹⁴⁾	「田鈿佃涸」(定母)
「同」	*long	(OB*dong)	「侗痾」(透母)「銅桐筒峒峒洞」(定母)



「道」	*luʔ	(OB*luʔ)	「首」(書母)「導」(定母)
「囟」	*da	(OB*d/la)	「囟」(定母)
「吞」	*hlin/*hlun ¹⁵⁾	(OB —)	「天」(透母)
「盜」	*laws	(OB*daw(k)s)	————
「陳」	*lrjin	(OB*drjin)	「陳陣」(定母/中古澄母)
「唐」	*lang	(OB*g-lang) ¹⁶⁾	「庚」(見母)「康」(溪母)「搪糖鷓塘糖」(定母)
「土」	*thaʔ (?)	(OB* hlaʔ)	「杜」(常)「吐」(透母)「杜」(定母)「肚」(端母)

このように仮説②を導入すれば、仮説①から判断し難い文字の音声の由来を推定できると考える。以下は、T-type/L-type のいずれの特徴も有するため「T-type か L-type かを判断できない文字」の通仮例である：

表4 〈T-type/L-type の判断困難な文字の通仮例 (2)〉

・ T-type と L-type のいずれの特徴も含む文字

* 表中【表記】【通仮】欄に網掛けされている字が T-type/L-type の判断困難な文字である

図版	表記	通仮	上古音韻地位	諧声関係例	例
	筓	席	筓(常鐸開)T	拓(透章)跖(章)	<u>G 成 34</u>
	石声	庶声?	席(邪鐸開)?	遮(章)撫(章)	
	泵	庶	石(常鐸開)T	拓(透章)跖(章)	<u>S2 魯 2, 6</u>
	石声		庶(書鐸開)?	度(定)遮(章)	

「席」は「庶声」であると考えられる¹⁷⁾。「庶」の諧声系列を見てみると、章母「遮撫」等と諧声関係にあり、T-type のようであるが「席」は中古で邪母となる。したがって、「席」は仮説①からでは T-type か L-type かを判断することができない。しかし、仮説②を導入すると、「席」は T-type と思われる「筓」と通仮しているから T-type と考えられるかもしれない

（「石」は常母であるから T-type か L-type かを判断できないが、仮説①に従い諧声系列を見てみると端・知・章母と諧声関係が有り、以・邪・船母と諧声関係が無いから T-type と考えられる）。ただし、なぜ T 由来である「席」が中古で邪母となるかについてはさらなる考察を要する。また表4、2段目の「泵」（「筲」と同じように石声の T-type と思われる）が「庶」に読まれることを勘案すれば、「席」を含め「庶声」の文字はやはり T 由来と考えるのが良いのではないだろうか。

また『上博楚簡』「周易」57号簡に「酌」（中古章母）が見え、対応する今本『周易』「既濟」では「禴」（中古以母）とある。仮説①に従えば、「禴」は L-type であるが、勺声の「酌」は庶声と同様に T-type か L-type かを判断できない。したがってこれも表4に含むべき例かもしれない。ただし、諸文献中では「禴」（中古以母）と「禴」のいずれもが祭祀を意味しており、『上博楚簡』「酌」は声符を同じくする「禴」を表している可能性があるため、本稿では分析の対象としなかった¹⁸⁾。「酌」については「禴」と「禴」との関係を含めた研究を要する。

前述したように楚簡における通假字の大部分で T-type と L-type は区別されているが、これに反する例も幾つか見られる。以下は T-type と L-type が通假している例である：

表5 〈T-type と L-type の通假例〉





図版	表記	通假	上古音韻地位	諧声関係例	例
	寔 ¹⁹⁾	實	寔(端質開)T	慳(知章)	<u>S5 融 5</u>
		實	實(船質開)L	——	
	實	經	實(船質開)L	——	<u>G 六 27, 28</u>
		至声	經(定質開)T	至(章)窰(知)	
	帝 ¹⁹⁾	惕	帝(書錫開)T	帝(端)適(章)	<u>S3 周易 38</u>
		帝声	惕(透錫開)L	易(以)惕(書)	
	堆	墜	堆(定微合)T	堆(端)佳(章)	<u>S3 彭 4</u>
		佳声	墜(定隊合)L	遂(邪)隧(邪)	

表5一番上の「實」は仮説①に拠れば、L-typeであるにも拘らず、T-typeの「寔」・「経」と通仮関係にある（2例が「實」と関連するのは興味深い）。また帝声の「寔」もT-typeと考えられるが、L-type「揚」と通仮関係にある²⁰⁾。このような例は本稿の分析結果の反証例となる。しかし、その数はT-typeとL-typeを区別するものに比べ遥かに少なく、表5中の【例】の欄を見ても分かるように、複数回現われているわけではない。したがってT-typeとL-typeが交流する例は一部に限られると言えよう。

また、このような例をT-typeとL-typeの合流の兆しであると看做すことも可能であるかもしれないが²¹⁾、いまそれを証するだけの根拠を持ち合わせてはいないため、前述の「土」（表3）や「席」（表4）等と同様に今後の課題としたい。

5. おわりに

諧声系列の分布を基礎とした仮説①を前提として、楚簡の通仮字に分析を加えた結果、T-typeの文字の通仮は概ねT-typeに限られ、L-typeの通仮はL-typeに限られるという結果を得ることができた。「通仮が当時の音を反映している」という性格を勘案すれば、この分析結果は仮説①を支持する証のひとつとなるとともに、戦国楚地にT-typeとL-typeの区別が存在していたということをも意味していると言える。もちろん表5で列举したように、T-typeとL-typeが通仮する例も確認される。今後、新たな出土資料中にT-typeとL-typeが通仮する例が現れる可能性も否定はできない。また表5通仮例をT-typeとL-typeの合流の兆しと看做すべきか否かという問題も残されたままである。それらを明らかにするためには体系的な研究に加え、文字毎のきめ細やかな検討も必要不可欠であろう。

いずれにしても、楚地の通仮字の大部分にT-typeとL-typeの使い分けが見られるということは、戦国末期の楚地周辺にT-typeとL-typeの区別が残っていたということの意味しているのではないだろうか。

〈注〉

- 1) 「酉」については、Fang-kuei, Li (1945: 336) を参照している。Fang-kuei, Li (1945:

- 336) は「酉」: Ahom: rāo, Lü: hrau4, Ddoi: thou3 を挙げ、古代タイ語に *r を推定する (Primitive Tai r-)。またその「酉」が『史記』で「老」、『漢書』で「留」と声訓関係にあることも挙げている。
- 2) 間語で来母が [d] に聞こえること等を考慮すると、[l] は無声無気音と遠く、むしろ有声音に近いと考えられる (『汉语方音字汇』第二版 2003: 34-35)。ただ、刘纶鑫 (1999: 155) に拠ると、贛語新余方言で端母が [l] に読まれる例もある (「店」「低」等、また顔森 (1981: 110) に拠ると、高安 (老屋周家) 方言でも「釣」等が [l] に読まれる例が見られる)。また呉語処衢方言では端母が [n] に読まれる例が見られ (『現代汉语方言概论』2002: 78)、贛語撫州方言では来母が [t] に読まれる例が見られる (『現代汉语方言概论』2002: 148)。
- 3) Baxter (1992) の段階では中古音三等韻には *-j- を再構するが、Baxter (1998: 72) では Starostin (СТАРОСТИН) (1989: 325-329) を挙げ、三等韻には *-j- を再構しないとする。鄭張尚芳 (2003: 171-187) も主母音に長短を認める。
- 4) 例えば、「多」は中古端母であり、「多」を諧声符に持つ「移」は中古以母であるから、仮説①からは T-type/L-type の分類ができない。
- 5) 三等重紐 B に *r を再構することに対して批判的な意見もある。宮本 (2001: 15) では緻密な検証のもと、*r 再構に関して疑問を呈している。
- 6) 『上博楚簡 (六)』「競公瘡」「今新登思吳守之」の「新」は「薪」に、「吳」は「虞」に読む。それぞれ声符を同じくし、通仮可能な範囲内であるから何ら問題ない。「思」は楚簡でしばしば「使」に読まれ使役を意味する。「虞」は『晏子春秋』の杜預注に「衡鹿、舟蛟、虞侯、祈望、皆官名也。」(衡鹿、舟蛟、虞侯、祈望は皆官名である) とあり、「新蒸」は『經典釈文』に「麤曰薪、細曰蒸」(麤いものを薪、細いものを蒸という) とある。
- 7) 「陞」「地」は異体字の可能性もある。「它声」と「也声」の通仮は『郭店楚簡』「五行」48号簡に「陞」「施」、『上博楚簡 (六)』「慎子曰恭儉」4号簡に「𠂔」「施」等が見える。また「地」は中古で脂韻 (三等) であるにも拘らず定母であることや韻部に問題が多い。Baxter (1992: 754) の再構音にも疑問符が付されている。
- 8) 「陶」の声符が「缶」であることに拠り、Bodman (1980: 111-113)、Baxter (1992: 232-234) 等は「陶」を *b-lu と再構し *b-lu > daw という音韻変遷を推定する。ここでのハイフンは便宜上付加されたものでハイフン無しとの違いは明らかにされていない。注 16 も同様の例である。
- 9) 林虹瑛ほか (2004: 71-75) は楚簡中で「一」を表す「罷」とタイ系言語を関連付け考察を加えている。楚の言語とタイ系言語との関係性についても考える必要があるだろう。
- 10) Bodman (1980: 99) は「佃」「甸」「田」に対応するチベット語 lings を挙げ、「佃」「甸」を *lings、「田」を *lins と再構し、Baxter (1992: 792) は「田」を *din と再構する。

- 11) 「呑」は『説文』にあるように「天声」であれば真部であると思われる。L-type 声母の真部である「申」を声符とする「軟」を楚簡中で「呑」と読むとすれば、「呑」が「天声」である可能性も否定できない（『説文』「呑、天声」）。ただし、注15でも指摘するように「呑」が中古で痕韻になることについても考えなければならない。
- 12) 「陳」は「申声」で表記されるため、そのまま L-type と看做せるかもしれない。
- 13) 表3で挙げた『上博楚簡』「武王」1号簡の例（「誚」「曙」の通仮）については、同様の用例が見られないことなど稍疑問が残る。他の文字に通仮する可能性も否定できない。
- 14) 鄭張尚芳（2003: 479）では「田」に -ng 韻尾を認める。チベット語との比較に加え、上古で真部と耕母の交流はしばしば認められるから、「田」に -ng 韻尾を認めるべきかもしれないが、ここでは「申」に通仮していることに拠り *lin と再構する。
- 15) 「呑」は中古で痕韻と先韻になる（『広韻』痕韻「咽也。吐根切。又音天一。」、先韻「姓也。漢有呑景雲。又湯門切。』）。痕韻は上古真部ではなく文部となる。本稿では真部「申声」と通仮していることと（さらに『説文』で天声とあること）、中古痕韻への音韻変遷を勘案し *hlin（真部）*hlun（文部）を再構しておくことにする。
- 16) 「唐」は『説文』で「庚声」とされるため Bodman（1980: 111-113）、Baxter（1992: 232-234）等に *g-l- と再構され、*g-l- > d- という音韻変遷が推定される。また『郭店楚簡』「緇衣」に「湯」とあるものが、対応する『上博楚簡（一）』「緇衣」に「康」とあり、「庚」「唐」「康」と「湯」の関係を考える上で興味深い。本稿では「唐」を *lang と再構しておく。
- 17) 「席」は『説文』で「古文从石省」とあり、「石」との関係も考えねばならない。
- 18) 「禴」については、『周易』「萃」鄭注に「禴、殷春祭也」（殷の春の祭祀である）とあり、また『詩経』「小雅・天保」の毛伝に「春曰祠、夏曰禴」（夏を禴という）とある。「禘」については、『礼記』「王制」に「天子諸侯宗廟之祭、春曰禘」（春の祭祀を禘という）とあり、その鄭注に「此蓋夏殷之祭名。周則改之、春曰祠、夏曰禘」（周はこれを改め、春を祠と、夏を禘という）とある。
- 19) 「齋」は「齋」のことである。ここでは図版に従い「齋」に作る。鄭張尚芳（2003: 304）は「齋」を *hljɛgs と再構し L-type と看做す。Baxter（1992）は当該字未収であるが、いまその体系に拠って再構すると *stjek となる。問題となるのは書母の扱い方である。本稿では、諧声系列上の分布にしたがい、中古書母は T-type/L-type のいずれにも由来すると考えている。
- 20) 今本では「惕」に作るが、馬王堆帛書では「惕」に作る。
- 21) 古屋（2008: 218）は「椎」「墜」の通仮から「AB」は戦国時代すでに合流し始めて居たかも知れない（ここで言う AB とは T-type と L-type のこと）とする。また古屋（2006: 209-215）は牙喉音系「聲」と L-type 「聖」の通仮等を挙げ、第一口蓋音化の一例としており、T-type と L-type の合流を考える上で興味深い通仮例である。

〈参考文献〉

- 古屋昭弘 2006. 「儒教と中国語学—出土文献と上古音—」, 『近世儒学研究の方法と課題』: 207-221 頁。東京: 汲古書院。
- 古屋昭弘 2008. 「上古音の開合と戦国楚簡の通仮例」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 54: 211-228 頁。
- 林虹瑛・村瀬望・古屋昭弘 2004. 「戦国文字「𠄎」について」, 『開篇』 23: 71-75 頁。東京: 好文出版。
- 宮本徹 2001. 「上古漢語の *r, *l について」, 『東京大学中国語中国文学研究室紀要』 4: 1-21 頁。
- 北京大学中国语言文学系语言学教研室編 2003. 『汉语方音字汇』第二版。北京: 语文出版社。
- 高 亨 1997. 『古字通假會典』。齊魯書社出版社。
- 侯精一主编 2002. 『现代汉语方言概论』。上海: 上海教育出版社。
- 李方桂 1971. 「上古音研究」, 『清華學報』 1, 2: 1-61 頁。
- 李方桂 1980. 『上古音研究』。北京: 商務印書館。
- 刘纶鑫主编 1999. 『客贛方言比较研究』。北京: 中国社会科学出版社。
- 潘悟云・徐文堪译 1999. 『上古汉语的辅音系统』。北京: 中华书局 (蒲立本 (Pulleyblank, E. G.) 1962. The Consonantal System of Old Chinese. *Asia Major* 9: 58-144.)
- 上海博物館 2001. 『上海博物館藏戰國楚竹書(一)~(七)』。上海: 上海古籍出版社。
- 荊門市博物館 1998. 『郭店楚墓竹簡』。北京: 文物出版社。
- 顏 森 1981. 「高安(老屋周家)方言的语音系统」, 『方言』 2: 104-121 頁。
- 郑张尚芳 2003. 『上古音系』。上海: 上海教育出版社。
- Baxter, William H. 1992. *A Handbook of Old Chinese Phonology*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Baxter, William H. Sagart, L. 1998. Word Formation in Old Chinese. In Jerome L. Packard (eds.), *New Approaches to Chinese Word Formation: Morphology, Phonology and the Lexicon in Modern and Ancient Chinese*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter. 35-76.
- Bodman, Nicholas C. 1980. Proto-Chinese and Sino-Tibetan: Data Towards Establishing the Nature of the Relationship. In Frans Van Coetsem and Linda R. Waugh (eds.), *Contributions to Historical Linguistics*. Leiden: E. J. Brill. 34-199.
- Fang-kuei, Li. 1945. Some Old Chinese Loan Words in the Tai Language. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 8: 333-342.
- Pulleyblank, E.G. 1962. The Consonantal System Of Old Chinese. *Asia Major* 9: 58-144.

- Pulleyblank, E.G. 1973. Some New Hypotheses Concerning Word Families in Chinese. *Journal of Chinese Linguistics* 1-1: 111-125.
- Schuessler, Axel. 1974. R and L in Archaic Chinese. *Journal of Chinese Linguistics* 2, 2: 186-199.
- СТАРОСТИН, С А. 1989. РЕКОНСТРУКЦИЯ ДРЕВНЕКИТАЙСКОЙ ФОНОЛОГИЧЕСКОЙ СИСТЕМЫ. : НАУКА. Главная редакция восточной литературы.

〈付記〉

本稿は日本中国語学会第 58 回全国大会における口頭発表をもとに加筆・修正したものである。本稿の執筆にあたり、貴重なご助言を下された諸先生方に心より感謝申し上げます。

上古音声母 T 类和 L 类——以战国楚简为资料——

提要 从上世纪的下半叶起，有一些研究上古音的学者，通过对谐声符的研究以及跟亲属语言的比较，认识到中古舌音（端知章组）在上古可以分成 T 类和 L 类声母。T 类是能跟端、知、章母谐声的一些字，L 类是能跟以、船、邪母谐声的一些字。这个学说目前受到许多学者的推许。本文以战国楚简为资料，对 T 类字和 L 类字在通假例中的表现进行分析，发现在楚简中 T 类字和 L 类字分别自成系统，互不通假。可见在战国晚期汉语中（尤其是楚地的汉语中）T 类和 L 类声母尚未合并。另外，有些字只根据谐声符的分布则无法确定到底属于 T 类还是 L 类，本文试图根据通假的情况来确定这些字的归属。

关键词 上古音 声母 舌音 楚简 通假字